

Brazilian Dreamin' <div>ブラジリアン・ドリーミン</div>
Joe Beck Trio <div>ジョー・ベック・トリオ</div>
1. 夢見る人生 <div>Vivo Sonhando 〈A. C. Jobim〉(5 : 13)</div>
2. カーニバルの朝 <div>Manha De Carnaval 〈L. Bonfá〉(4 : 48)</div>
3. アクエリアス <div>Aquarius 〈J. Donato〉(6 : 46)</div>
4. オ・グランジ・アモール <div>O Grande Amor 〈A. C. Jobim〉(4 : 49)</div>
5. フェリシダージ <div>Felicidade 〈A. C. Jobim〉(5 : 26)</div>
6. アンド・ヒアズ・トゥー・ユー <div>And Here's To You 〈J. Beck〉(5 : 49)*</div>
7. ブラジル <div>Brazil 〈A. Barroso〉(5 : 47)</div>
8. 彼女はカリオカ <div>Ela E Carioca 〈A. C. Jobim〉(4 : 50)</div>
9. 愛の語らい <div>Falando De Amor 〈A. C. Jobim〉(6 : 21)*</div>
10. ザンジバー <div>Zanzibar 〈J. Beck〉(5 : 14)</div>
11. ジャイアント・ステップス <div>Giant Steps 〈J. Coltrane〉(5 : 07)</div>
12. ホワット・ウッド・アイ・ドゥ・ウィザウト・ユー? <div>What Would I Do Without You? 〈J. Beck〉(4 : 37)</div>

ジョー・ベック Joe Beck (guitar) **アイラ・コールマン** Ira Coleman (bass) **ティエリー・アルピノ** Thierry Arpino (drums) **スペシャル・ゲスト グレゴワール・マレー** Gregoire Maret (harmonica)*

録音：2005年9月27、30日　ザ・スタジオ、ニューヨーク

©© 2006 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.

*

PProduced by Tetsuo Hara & Todd Barkan. Recorded at The Studio in New York on September 27 & 30 , 2005. Engineered by Katherine Miller. Mixed and Mastered by Venus 24bit hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Thierry Arpino plays GMS Drums, Zildjian Cymbals, Regal Tip Sticks and Evans Drumheads. Gregoire Maret plays Suzuki SCX-48 Harmonica Front Cover : © The Estate of Jeanloup Siefert / G. I. P.Tokyo. Designed by Taz.

しても、この曲はやはりボサノヴァの黎明期を代表する1曲として知られている。タイトルどおりドリーミーなメロディを、ベックはスムーズなフレージングで迎ってみせる。エレクトリック・ギターの乾いた音質が、アコースティック・ギターで演奏されることの多いボサノヴァに新鮮な味わいをつけ加えている。

2. カーニバルの朝

ギタリストのルイス・ボンファは、ジョピンと共にボサノヴァを作ったひとりと呼ばれている。その彼がブラジルとフランスの合作映画『黒いオルフェ』のために書き下ろしたナンバー。発表されるや世界中で大ヒットし、ボサノヴァの枠を超えて多くのひとから愛される1曲となった。幻想的なイントロを経て、ベックがお馴染みのメロディを思索的な音遣いで弾いてみせる。エコーとも余韻ともつかないディレイ・マシーンによる響きが特徴的だ。

3. アクエリアス

ジョアン・ドナートの代表的なオリジナル。ベックはコード・ワークとシングル・ノートを巧みに織り交ぜて美しいメロディを綴っていく。ゆったりとした雰囲気が、ボサノヴァの香りを強調するような演奏である。本来は超絶的なテクニックにも秀でている彼だが、この作品ではこのトラックのように非常に悠然と構えたプレイを披露する場面が多い。これもボサノヴァを演奏することで引き出された要素だろう。中盤から後半にかけてはベースとドラムスの短いソロも登場する。

4. オ・グランジ・アモール

ジョピンのオリジナルには名曲が多い。しかもヒット曲の大半は、1950年代末から60年代中盤、すなわちボサノヴァがブームとなった初期に書かれている。視点を変えるなら、彼の作品で代表される優れた曲が多かったことから、ブームが巻き起こったということになるのだが。これもそんなブームに拍車をかけた1曲。ストレートにメロディを弾くことで、ベック

はこの曲が持つ哀愁やロマンチックな要素を強調してみせる。このアルバムに収録されたすべての演奏について言えることだが、曲のよさを大切にしながら、その上で個性を発揮してみせるベックの姿が好ましい。その最たる例となったのがこのトラックだ。中盤ではアイラ・コールマンのベースがメロディをなぞってみせる。これもシンプルながら心揺さぶられる場面だ。

5. フェリシダージ

ジョピンの代表曲のひとつが通常よりややテンポを落として演奏される。それによって、本来は飄りを帯びた印象の曲が優雅さに溢れるものとなった。ちょっとした違いでイメージが変わることは多い。その代表的な一例がこのパフォーマンスだ。特徴的な乾いたギター・サウンドがクールに響き、ボサノヴァが持つ粹な部分を強調した演奏に仕上がっている。ベックとボサノヴァは、イメージからいけば水と油だ。しかし、こうやって聴いてみると抜群の相性のよさであることがわかる。

6. アンド・ヒアズ・トゥー・ユー

ベックはこのアルバムで3曲のオリジナルを紹介している。そのうちの1曲であるこのトラックでは、ハーモニカ奏者のグレゴワール・マレーがゲスト参加してカルテット編成になる。美しい和音を持つイントロを経て、スロー・ボッサによる繊細なテーマ・メロディが登場する。ボサノヴァにはそこはかとなじ寂しさが漂う。それを見事に表現しているのがこの曲であり、マレーのハーモニカだ。

7. ブラジル

わが国ではコマージュにも使われていたから、この曲をご存知のかたは多いだろう。エキゾチックなメロディを、ベックはゆったりと演奏してみせる。フレーズの美しさをひとつずつ確かめながらギターを弾いているような印象のパフォーマンスだ。そして確認が終わると、今度はそのメロディを崩しながら自分の世界に入っていく。それでも常に原曲からつかず離れずの位置をキープしているところが好ましい。

8. 彼女はカリオカ

陽気なリズムで演奏される原曲を踏襲して、ベックのトリオがリズムックなパフォーマンスを繰り広げる。最初からコールマンがソロを取る構成もいい。それを受けて、ベックがジャジーなソロを展開してみせる。このアイデアもご機嫌だ。終盤ではベックとドラマーのティエリー・アルピノによる小節交換

もフィーチャーされて賑やかに演奏が締め括られる。

9. 愛の語らい

グレゴワール・マレーのハーモニカがしっとりとした味わいで郷愁を誘う。ジャズ・ハーモニカの第一人者であるトゥーツ・シールマンスを思わせる素晴らしい表現力が耳を引きつけて離さない。この楽器が持つ金属的な響きがクールで、それも情感を高めることにつながった。ベックのギターは、それに負けずと官能的な演奏に終始する。これは、両者の表現力がぶつかり合うことで見事な演奏を導き出したトラックだ。

10. ザンジバー

ベックは曲を書かせても素晴らしい才能を示す。その典型がこのトラックで聴ける。ボサノヴァと言うよりロック的な8ビートによる演奏だが、和音の用い方はボサノヴァそのものだ。そこにセンスのよさが感じられる。コード・ワークの上手さにも定評のある彼だけに、その真骨頂がこの演奏では堪能できる。

11. ジャイアント・ステップス

ブラジルでボサノヴァが生まれたのは1950年代末のこと。同じころに、アメリカではテナー・サクソ奏者のジョン・コルトレーンがこの曲を録音していた。ボサノヴァとはまったく関係のないブルース形式で書かれたこの曲は、彼の代表作として知られる1959年録音の『ジャイアント・ステップス』(アトランティック)のタイトル・トラックだ。それをボサノヴァのリズムで演奏するとは意表をつかれた形である。

12. ホワット・ウッド・アイ・ドゥ・ウィザウト・ユー?

ベックが書いた穏やかなムードのオリジナル。洒落たフレーズで構成されたテーマ・メロディが大人のジャズを思わせる。かつてばりばりのフュージョン・ギタリストだった彼を思うと、こういう曲を書き演奏することに隔世の感を覚えずにはいられない。

1975年にKUDUレーベルに吹き込んだデビュー作『ベック』によってフュージョン・シーンで人気者の仲間入りを果たしたギタリスト　最近のファンは知らないかもしれないが、昔からジャズを聴いてきたひとがジョー・ベックでまず思い浮かべるのがこのことだろう。もちろん、それ以前からさまざまなセッションに参加していた彼のプレイは注目を集めていた。しかしデヴィッド・サンボーンを含むこの作品によって、ベックは見事に一本立ちを果たしたのである。それまでの彼は、ロックからフリー・ジャズまで、とにかくチャンスがあれば何でもこなしていたセッション・ギタリストのひとりだった。

勲章的なことを紹介するなら、マイルス・デイヴィスがロッキングなアプローチをするようになった最初のレコーディングにベックは起用されている。1967年12月4日に吹き込まれた「サークル・イン・ザ・ラウンド」で彼は初めてマイルスのセッションに呼ばれ、そのまま立て続けにいくつかのレコーディングに参加したのだった。

しかしそれらは当初お蔵入りして、次いで起用されたジョージ・ベンソンとの「パラフェルナリア」(1968年1月16日)が『マイルス・イン・ザ・スカイ』(ソニー)に収録されて世に登場したため、「マイルスがロッキングな演奏を始めたきっかけはベンソンとのセッション」となってしまった。それでも、それ以前にベックとの試行錯誤があったことは見逃せない。

これはギル・エヴァンスの推薦によるものだが、何故ベックが起用されたのかと言えば、ギルがセッション・ギタリストとして囁らしていた彼の柔軟な音楽に対する姿勢を見込んだからである。こうした事実からもわかるように、1970年代に入って巻き起こったフュージョン・ブームの中で、ベックは非常に重宝がられていた。

ところが、ベックはフュージョン・ギタリストだけにとどまらなかった。ケニー・バレル、ジム・ホール、ジミー・レイニー、タル・ファーロウ、ジョー・パス、バーニー・ケッセル、ウエス・モンゴメリーといった具合に、彼はジャズ・ギターの王道を行くギタリストを手本に、それらのスタイルを自身のプレイに取り込んできたのである。だからこそ、フュージョン・ギターのブームが落ち着いて再びアコースティック・ジャズが注目を集めるようになってからも、彼は存在感のあるギタリストであり続けることができたのだった。

その最新の姿を伝えているのがこの作品だ。共演するのはベース奏者のアイラ・コールマンとドラマーのティエリー・アルピノである。このギター・トリオを中心に、2曲ではゲストとしてパット・メセニー・グループのハーモニカ奏者、グレゴワール・マレーが加わる。彼らが演奏するのはボサノヴァで、これもベックのギターを楽しむ上では格好のテーマと言えるだろう。

ボサノヴァは、1950年代後半、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ周辺で、アントニオ・カルロス・ジョピン、ルイス・ボンファ、ジョアン・ジルベルトといった新進気鋭の音楽家たちが作り出した音楽だ。彼らはブラジルの伝統音楽＝サンバのリズムにジャズから影響を受けたモダンなメロディやハーモニーを重ねることで、従来のブラジル音楽とは違うサウンドを表現しようとしていた。それがボサノヴァとして世界的な注目を集めるようになったのは、1959年に制作された映画『黒いオルフェ』に彼らの音楽が使われ、また直後にハービー・マンやスタン・ゲッツといった大物ジャズ・ミュージシャンが彼らと共演アルバムを録音したからだ。

それらがヒットしたことで、ブラジルのニュー・リズム＝ボサノヴァが一躍脚光を浴びるようになった。またアストラッド・ジルベルトというアイドルが登場したことから、その人気が定着したのである。そして、現在ではボサノヴァは単なる民族音楽のひとつではなく、ポピュラー音楽の大きな分野を占めるまでになった。とりわけ、ジャズ・ミュージシャンにとっては格好のテーマである。それだけに、ベックがこの作品でどのようなボサノヴァを聴かせてくれるのか、そこが大きな楽しみでもある。

	演奏紹介	
1. 夢見る人生	ボサノヴァと言えばアントニオ・カルロス・ジョピンの曲である。彼が書いた「イバナマの娘」や「ワン・ノート・サンバ」ほどは有名でない	

^[1] (c)WINGS 06032379；小川隆夫/TAKAO OGAWA]